

オーストラリアの星空に考えたこと

高田 万帆

そこに在ったのは見渡す限りの星だった。

それは今年の夏訪れた、オーストラリア、

ケアンズでの事だった。今回、参加したオー

ストラリア研修旅行は、2週間、ホームステ

イをしながら現地の学校に通うというものだ

った。普段シャイな私は、英語でのコミュニ

ケーションに不安を覚えたが、思い切って、

参加を決めた。

私の考えを大きく変えるものがこの旅には

あった。

出発前、私はオーストラリアについて様々

なことを調べた。アボリジニのこと、オー

ストラリアに住む動物たちのことなど、オー

ストラリアは魅力であふれていた。その中で

も私が惹かれたのは「星」だった。

「オーストラリアは星がきれいだ」

自身もオーストラリアに行ったことのある兄

が、興奮気味に話してくれたことがある。見

渡す限りの星空がオーストラリアには在る、  
と。東京に住む私は「星」といつても思い浮  
かぶのは夜空にぼつんと一つ、孤独に浮かぶ  
ものだけ。だから私は満天の星に強い憧れが  
あつた。  
オーストラリア到着後、星を見るためにホ  
ストマザーに連れていってもらった夜のビー  
チは静かだつた。東京の喧騒、都会の息苦し  
さ、急かされるような気持ちすらも存在しな  
い。心地よい静寂がビーチを包んでいた。「  
よし、そうつぶやいてから、一度深呼吸をし  
て思い切つて空を見上げた。そして、言葉を  
失つた。  
そこに在つたのは、見渡す限りの星空だつ  
た。  
不意に落ちていきそうな感覚がわたしを襲  
つた。ちっぽけな存在の私がどれだけ一生懸  
命手を伸ばしても星には届かない。もどかし  
いような、それでいて満たされているような  
言い表せない感情があとからあとから溢れて

きた。それだけ、星には圧倒的な存在感があった。わたしは星に飲み込まれたのだ。そして思った。私はこの「星空」を守りたい、と。

都会では人工的な光が、自然の星の輝きを消してしまっている。私たちが過剰な光を求めれば求めるほど、空に見える星の光は失われていく。東京での私は、星空を見上げることも忘れてしまっている。私たちはいつか夜

空の星の存在すら忘れてしまいかもしれない。それは、同時にひとときの夜の静寂を味わう心の余裕や、自分がちっぽけな存在だと思う気持ちも忘れてしまうことにならないだろうか。私には、そのことが、ひどく恐ろしく

感じられた。東京の人々はオーストラリアに来る前の私のように、「星」と聞くと、ただ一つだけの

星しか思い浮かばないかもしれない。将来、

「空の星」を知らない人もでてくることもあ

りうるだろう。

オーストラリアの「星空」は私に改めて気づかせてくれた。「私たちが星々の下で暮らしている」ということを。